

ャーターしてきたのが現状である。測器の取り付けで機体に穴をあけるような改造、または悪い気象条件のもとでの観測飛行など民間機に頼ることは観測面で制約を受けるだけでなく、安全性にも問題が出てくる。また一方では、測器の開発やエキスパートの養成を見ても、日本での飛行機観測がたち遅れているために、観測からもち

らされる学問的刺激も乏しい。

海洋研究所の淡青丸・白鳳丸の2隻の観測船が、海洋・水産部門に大きな貢献をしてきたことを考えても、気象学の広い分野に対する役割の上で飛行機観測の重要性を考えると、大気物理研究所に観測用飛行機が是非附置されることが必要であろう。

気象学若手会案内

気象学若手会は1966年10月の日本気象学会昭和41年度秋季大会後に、若手研究者、大学院生の親睦会として誕生し、その後名簿の発行、各研究機関相互の交流などに努め、会員数約100名にまで成長してきました。1967年10月の集りでは、学会費の値上げに関して、学生会員割引きを要求する意見をまとめて、理事会に提出し、現在の学生会員制度を生みだす力となりました。その後、機関紙の発行（すでに4号）、規約についての討論、さらに研究内容についての討論会も学会時に若手会で企画されるようになりました。今後さらに発展させて、物理や地球電磁気での「夏の学校」のようなものが開けるだけの力がつけばと考えています。また最近気象学会で70年代の気象学はいかにあるべきかという点から、気象学長期計画が焦眉の問題となっています。これについては、若手会も正面から取り組まなければならないものとして考えています。そして70年秋季大会には気象研究所の古川氏、東大大学院生から意見が表明されました。（天気第17巻第9号、研究面については限られた範囲であるが、天気第17巻第7号）

今後、たんに学会開催時にのみ集る消極的な会から脱皮して、学会発展のために、個人個人がますます努力すると同時に、発展の障害となる種々の体制を変革していくために積極的に行動していきたいと考えます。同好の皆さんが下記の連絡員に連絡されて、若手会に加入されますことを勧誘いたします。なお1970年度名簿が少数残っておりますから入用の方は東大若手まで連絡して下さい。

《連絡員》

北海道大学 理、修士2 山口 勝輔
札幌市北十条西八丁目

北海道大学理学部地球物理学科気象教室
東北大学 理、博士1 徳田 正幸
仙台市片平丁 東北大学理学部地球物理学教室
お茶の水女子大学 理、修士1 国井 秀子
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学大学院理学研究科物理
東京大学 理、博士1 佐藤 康雄
東京都文京区弥生2-11-16
東京大学理学部地球物理学教室気象研究室
東京大学 海洋研、博士2 近藤 洋輝
東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所海洋気象部門
気象研究所 古川 武彦
東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所台風研究部
国立防災科学技術センター 八木 鶴平
東京都中央区銀座6-15-1
名古屋大学 水質研、博士3 石坂 隆
名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部水質科学研究施設
京都大学 理、博士2 岩嶋 樹也
京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部地球物理学教室気象研究室
福岡大学 理、講師 宇加治一雄
九州大学 理、博士1 楠田 信
福岡市箱崎
九州大学理学部物理学教室大気物理研究室
（気象学若手会1970年度センター
東大理 位藤 康雄）